

平隠岐守最愛せり 角て<sup>(128・オ)</sup>薩隅日の中 逆徒の残黨赤族追悉く誅せられ  
て 四方の兵烟収り 干戈弓矢を箱にせり 民屋日々に潤敷太平国とぞ  
成りにけり

庄内軍記終り

文久元年辛酉六月廿三日写之

山田瀬之口住士 桂木與相書<sup>(ウ)</sup>

傳

嗚呼前聖有遺誠 不義而富且貴於我如浮雲 誠哉 人臣之欲蔽聰明圖  
利己者 皆所以自滅而已 曾聽伊集院右衛門太夫忠棟云者<sup>刺髮号幸侃ト也</sup>薩隅日三  
州賢大守修理太夫義久公之旧臣也 原其曩祖出大隅守忠時公之七男常陸  
介忠經 伊集院大和守忠朗<sup>法名孤舟</sup>之嫡孫也 而忠棟相續父祖家業 執国<sup>(129・オ)</sup>老  
權 逞其威餘<sup>リ</sup>欲墓三州殆日尚矣 潜訴殿下秀吉公 薩隅日三州改替貴族  
領地 自掠日州十三里邑里 且欲并三州 其謀發覺達太守公之耳聰 故  
慶長四年三月九日 薩摩少將忠恒公徵忠棟茶亭手誅之 其子忠真在庄内  
に 楯籠都城且構十式之砦 欲報讎大守公 於茲忠恒公自率数万兵 発鹿  
児嶋陣東霧嶋 公来後<sup>(ウ)</sup>處々合戦 自同年六月中旬終翌年二月下旬 其  
間勝敗利鈍不遑枚挙 嗚呼惜哉 勇兵義卒惜名一戦功 雖伏三尺霜 骸  
骨未乾名先消却 况自慶長到今殆幾一百年 則戦死勲功亦不遺 世称嘆  
紛然失矣 說其事今也則耳者僉起感 雖然恨自忠棟陰謀始 到忠真伏誅  
終 不便細說 先是往々雖有其記 簡所載大概也 今又拾彼書餘事<sup>(130・オ)</sup>

不顧世誹謗 補筆其闕略 漸為一篇矣

に露命を助られ己かさま／＼引分レ 家々に身を寄て 浮世を忍ぞ無慙なる 爰に白石永仙は最前忠真が家臣を集メ 諸人の異見を問し時一向謀反を進めし罪 殊には去年拾二月安永城に火の手を揚ケ 味方の勢をみな<sup>(124・オ)</sup>殺にせしも 専彼等が謀計なれば 重罪さし置かたきとて 拾二月廿九日忽に頸を刎て 始羅郡脇元にて獄門にぞ晒されける 然るに忠真其身の死罪を宥られ 剩へ懸命の地を賜ふといへとも 中心に勃逆<sup>ぼつげき</sup>を改されば 太守公も一向虎を養患ひを忘れ給す 年月を経るほどに慶長七年にぞ成りにける

忠真兄弟被誅事<sup>付</sup> 平田増宗伏誅之事<sup>ウ</sup>

同年の秋忠恒公御上洛有べきよし国老之衆へ仰出され 源次郎忠真も供奉致へき命を蒙り 太守公の肩輿に従侍して 同八月十七日日州野尻に着せ給ふ 旅亭の秋の徒然に 鹿狩の輿を催して 自身に御馬を出させ給ふ 村尾源左衛門尉入道松清 敷根仲兵衛尉 川田大膳亮其日の奉行を承り 万卒にて山を囲み 峯に登り谷に下りて<sup>(125・オ)</sup> 鳥獸餘多<sup>あもの</sup>獲にし 其日の輿を添られしかは 一入御入輿まし／＼て 日もはや西に傾ければ 御馬を帰させ給ふ 日州穆佐の住人押川治右エ門尉と淵脇平馬といふもの 密に太守公の命を蒙りて 忠真が通を 鉄炮を放て射殺ぬ 両人のものは人違にもてなして 忽腹をぞ切たりける 彼者共の振舞誠に忠心人に越 世挙て芳名を感じ 好士の<sup>ウ</sup>働也 と誉ぬものこそ無りける 時移り事去て二人が子孫を召出され 多分の所領を賜ふとかや この時平田新十郎は忠真に馬を双て討れたりけるが 忠真已に角なり

ければ 平田が一黨相働といへとも 終に主従拾六人一枕に討れける 是は平田太郎左衛門尉増宗の嫡子也 増宗逆徒の一味粗露頭せし事や有けん 退命を一時に<sup>(126・オ)</sup>縮し事は いと墓なくそ見へにける 同日忠真が弟小傳次は龍伯公の召に應じて 國分に参勤せし処を 猿渡新助 阿多神左エ門両人密に太守公の命を蒙り 濱の市に待受て 忽伏誅す 忠棟が末子三郎五郎 千次郎は義弘公の召に應じて 鹿兒府に参謁せしめんため谷山に到處を 嶋津右馬頭征久の下知として 中村に兵を<sup>ウ</sup>伏て 忽伏誅す 時に東條清閑が一子六左エ門尉といふもの 一騎當千の勇賢なりしかは いつを期すべき身にあらずと 多勢の中に切て入 手強雄を争ふ 然共大勢に堪す 終に鎌田弥□に討れて 骸骨空數名を留ム 忠棟が妻女 老母は猶阿多に居たりしか 家老安樂四郎左衛門 東八郎兵衛此事を聞と否や<sup>ヘマ</sup> 迎も遁れ給ふまし 速に御自害<sup>(127・オ)</sup>あるべし とて家々に火を掛 其身も共に腹切て 煙と共に失にけり かく三族をも尽事 偏に幸侃か悪逆に超過して 君を犯し奉んとせし 其重罪忽に天の惡しみを蒙て 技根を盡て消滅せし 運の程こそ拙けれ かくて 年月移ルに随ひ 平田太良左エ門尉増宗は幸侃入道と一味して 其讎を含む由 世挙て唱ければ 将来の誠なれば<sup>ヘマ</sup> ひとそかに<sup>ウ</sup>彼を誅すべしとて 押川郷兵衛尉 中村源之丞といふもの君の命を蒙り 増宗が領地入来院に趣所を七瀬戸に待受て 件の兩人鉄炮にて立処に射殺す 此時平田の一族共尽誅せらる 忠恒公の御妹は忠真に嫁し給ひ 然に忠真誅せられし後は 嶋津下野守久元に嫁し給ふ 此服に忠真の女子有 豫州の松

江戸にましまししか 西戎悉く服従 安寧<sup>(ウ)</sup>和樂の由 貴聞に達せしか  
は 御書を義弘公に賜ふ 其詞に曰く

庄内之儀悉相澄之由 従少将殿之書状披見 得其意候 近日令上洛  
候間 期其節候 猶石川左衛門太夫可申条令省略候 恐々謹言

四月十日

家康 御判

惟新

北郷長千代丸本領安堵之事

<sup>(120・オ)</sup>

夫庄内は北郷の元祖尾張守資忠已來の本領たり 殊には今度の忠賞と  
して 忠能に返し給ふといへとも 其内山田野々三谷志和池は此度の一  
乱に 太守公御出馬にて粉骨の地なれば 是を残し置るといへとも 累  
代北郷家は太守公に對し奉り 一日片時も不忠の義なし 殊には今度の  
兵乱にも軍<sup>(ウ)</sup>功他に異也しかは 件の三ヶ所無残重而下し賜の由 十一  
月廿三日忠恒公御書を賜ふ詞に曰く

庄内之儀雖為譜代之地 依天下之例被成檢地分国 中就改易幸侃被成  
下御朱印 近年令居住候処 無道之驕有之候間加成敗 即始都城處々  
返遣一万石 今加増候 然者各依為粉骨之地 志和池山田<sup>(121・オ)</sup>野々三谷  
雖残置候 北郷家之儀其方相讀迄 及十三代候歟 於當家代々一日片  
時も無不忠之旨 證文候由承知候 且は銘其感且為今度之弓箭 右三ヶ  
所宛行候 全被領知 弥可披忠懇候 別而家老之衆江以右知行之内令  
配分候 其方幼稚候条 入念諸式可相勤由 申聞如此候 尚平田太郎<sup>(ウ)</sup>  
左衛門尉 鎌田出雲可申候也

慶長五年十一月廿三日 忠恒 御判

北郷二郎どの

か、りしかは先達而賜ふ処の都城安永高城山之口勝岡梶山梅北の七ヶ所  
に 彼三ヶ所の地ヲ陪して 四万四千餘石也 此内各三百斛宛家老北郷  
源左衛門尉久観 同喜左衛門尉久陸 土持吉右衛門尉重綱 小杉<sup>(122・オ)</sup>丹後  
守重頼は鹿兒府の命により 是を宛行る 去程に同月一日一族家臣悉薩  
州祁答院を去て 庄内の地に立帰れば 枯木も再び春に逢ひ 花の開る  
心地して つらき世のことわざも 邯鄲一炊の夢の中にぞ替りけん 哀  
樂互に行こうこと今に始ぬ事ながら 常なき世にもたのみ有り とて諸  
人の和樂の思ひをなせり

<sup>(ウ)</sup>

白石 永仙 梟首之事

祇園精舎の鐘のこゑは 諸行無常の響きあり 沙羅双樹の花の色は  
生者必滅の理を顯す 奢もの久からず 春の夜の夢の如し 猛き心もつ  
るには亡ぬ 風の前の灯に同し 逆徒の張本忠真は都城を開退の後は  
世を浮草の根を絶て よるべ定ぬ蜚小船 萬むかしに引替て 有身とも<sup>(123・オ)</sup>  
なき風情にて 心つくしや薩摩なる穎娃郡に漂泊して 暫月日を送し  
か 其後太守公の恵を得 貳万石の采地を賜り 隅州帖佐に居をしめて  
年月をそ過しける 忠真か弟小傳次 同千次 三郎五郎<sup>并</sup>忠棟が妻女を  
は薩州阿多に移させ給ふ 譜代の家臣從類等も皆諸共に分散して 有共  
わかぬ浮栖居 身を知る雨の止時もなく<sup>(ウ)</sup> 涙や袖を濡すらん 盛衰殺那<sup>(ハマツ)</sup>  
に變化して 夢とも合ぬ 現共定なきよそ哀也 忠真か家臣一族等も纔

忠真が兼日の罪をゆるし 懸命の地を与へ 嶋津の幕下に属しめんや  
左なきに於ては 越後国川中嶋を忠真に宛行べきの旨 かの地を安堵な  
さしめんや 兎も角も義久忠恒の思維あるべきと仰下されける<sup>(ウ)</sup> 義久  
公も忠恒公も内府公の命を重し 忠真が死罪を宥 懸命の地を宛行るへ  
きにぞ定りける 故に義久 忠恒も相共に庄内に到らせ給ひ 和睦の計  
略 已に誓旨腥血を以て写し給ふ

#### 起請文前書之事

い集院源次郎到寺澤志摩守<sup>殿</sup> 當家<sup>江</sup>者堪忍仕間敷之由墨付を以申候儀  
雖遺恨深重<sup>(116・オ)</sup> 内府様御曖候条差捨候 然者源次良罷出令奉公者 以来  
之儀可召仕候 自然其身不屈之儀 又者讒訴之族於有之者 遂糺明以其  
上 如何様にも可申付候

#### 右之旨於相違者

奉始上梵天帝釈四大天王 下者堅牢地神冥官冥衆 總<sup>シテ</sup>日本國中大小  
神祇 別而<sup>ハ</sup>當国鎮<sup>(ウ)</sup>守八幡大菩薩開聞正一位鹿兒嶋諏訪上下大明神愛  
宕大権現大天狗小天狗天満自在天神御部類眷屬等 神罰冥罰可罷蒙<sup>ル</sup>者  
也 仍起請文如件

慶長五年<sup>庚子</sup>二月式拾九日

忠恒 御血判

龍伯 御血判

山口勘兵衛殿

直友此誓詞を以忠真に示されければ 忠真を始め諸城の軍兵皆籠鳥の囿<sup>(117・オ)</sup>  
を出 涸魚<sup>かしやう</sup>の水を得たる如く 色めきあふ事斜ならず 故に同月廿九日

梶山勝岡山之口同時に皆城を降る 嶋津中務太夫忠豊 北郷作左エ門尉  
三久入替て城を請取 三月朔日高城降参 三久 忠豊是を受取 同二日  
安永野々美谷両城降参 爰江は平田太郎左衛門尉増宗 白濱太郎左衛門尉<sup>(ウ)</sup>  
尉 相良新右衛門尉 三原諸右衛門尉重種相向て城を請取 同九日未  
吉下城す 肝付半兵衛尉 吉利奎右衛門尉 敷根仲兵衛尉 川田大膳亮  
これを受取 同十日梅北降城す 入来院重時 村尾松清これを請取 十  
五日財部降城す 嶋津右馬頭征久 三原諸右衛門尉重種<sup>かしこ</sup>彼所に到て城を  
請取 同日に忠真も都城を開退して 太守公の旗下に降る<sup>(118・オ)</sup> 故に前太守  
義久龍伯公 薩摩少将忠恒公も森田之御陣を御進發有 都城江入せ給ふ  
然るに此都城は長千代本領なれば 異儀なく宛行せ給由也 長千代丸  
感涙袖に餘り 多年の本望此時に達し 喜悅の眉を開かれける 長千代  
丸即ち元服して 北郷二郎忠能と名を賜ふ 忝も忠恒公自ら加冠をなさ  
しめ給ふ 理髪は比志嶋<sup>(ウ)</sup>紀伊守国貞 誠に由々敷事共也 錦を衣にし  
故郷に帰る詞の末こそ思ひやらるれ 然に忠能は六歳にて祁答院に移ら  
れしが 今年已に拾壹歳にて亦本領を安堵して 再び故郷に還住せらる  
果報の程こそゆゝしけれ 同拾八日龍伯公 忠恒公も都城を立せ給ひ  
薩陽鹿兒府に御凱陣あり 干戈を箱に納め 弓を袋にし給ひ 三ヶ国の  
軍勢<sup>(119・オ)</sup>も皆太平の曲を唱て 已か宿<sup>ノ</sup>に立帰り 軍勢の労を休めける  
然に嶋津兵庫頭義弘入道惟新公は在伏見し給ひて 日州の乱逆を遙に  
聞召し及れて 御心安き隙もおわせさりしに 忠新已に降城して 日州  
平治の由注進有 御喜悅殆不浅 眉宇に溢れて餘有 其比家康公は武州

堀溝に餓死するもの多かりけり 忠真いよ／＼聞に忍ス 又志和池に糧  
 を入れんと志して 軍兵三百餘<sup>(111・オ)</sup> 人を分 い集院新右衛門を大将として  
 上村奎之介を足輕の將として 糧を雜卒に荷せ 間の垣を打破らんと  
 慶長五年<sup>庚子</sup>正月四日夜に入テ 高城の沼口より志和池の城にと趣ける  
 間の垣に着と等しく 熊手薙鎌斧鉞にて固き間の垣をたゞ一時に切破て  
 城中に入んとせし処を 森田の御陣この事を聞や否や 族居たる軍徒  
 先を争ひ<sup>(ウ)</sup>競て馳續き 勇を勵す兵とも かの三百餘騎の敵徒共と入乱  
 て戦ければ 皆悉糧を捨 城中へぞ逃入ける 損の上の恥辱哉と 笑ぬ  
 ものはなかりけり 元來城中糧尽て 當時の飢を忍がたきに 新右衛門  
 尉思帰道も違背して 多勢を率し徒に又城中に加りぬ 弥軍兵喉乾て  
 叫嘆木食の苦を現りに見る心地なれば 城主い集院掃部介衆兵に向ひテ  
 言<sup>(112・オ)</sup>けるは 城中已に糧盡て 運命爰に窮ぬ 逆も死スへき我身なれば  
 今一軍<sup>イ・イナ</sup>して死せん事 勇士の本意たりといへとも 今万卒の機を見る  
 に 力尽氣疲れたり 縦討て出たりとも よも墓々數軍はせし 空く敵  
 の兵馬の蹄に掛らるゝか 又は甲斐なく生捕れて 名字の恥辱を晒し  
 後の世迄も残るより外有べきとも思はず 角して恥を見んよりは 速に<sup>(ウ)</sup>  
 城を降り 城中餓伏て 東西分ぬ女童の命を繼んはいかゝあらんと  
 責ての事にいひければ 并居<sup>なみ</sup>たる軍卒共異口同音に唯諾して 同く二月  
 六日には旗を卷て 甲斐なき露の命を捨かねて 城中を明渡す 誠に衆  
 兵の軀たらく形容枯槁憔悴して 哀成ける有様なり

山之口軍のこと

(113・オ)

比は衣更着拾四日 薩摩少將忠恒公高城御發駕あり 敵の糧を減せん  
 ため 寶光山に備へを設ケ 麦作をからしめ給ふ 北郷家の軍兵は田原  
 に備て居たりしに 山之口城より敵兵許多競ひ来て 鉄炮を放ち挑戦ふ  
 味方に迫田久右衛門 栗山喜兵衛良親 永井弥兵衛 瀬戸山石見打死  
 す されとも味方打勝て 敵卒忽ち敗北す 北を追<sup>にぐる</sup>亡<sup>はせ</sup>を奔て 山之  
 口の大手修禪寺の門外まで 息をも休す責入ける 城中よりも討て出  
 闘戦汗血して功名を争ひ 更に時をぞ移しける 忠真か家臣田中小兵衛  
 尉と云ものは 修禪寺の住僧春朝僧朝の甥なりしか 忽ち討死せり  
 春朝坊<sup>に</sup>のひす甥<sup>甥姪</sup>なては天倫とて 宿縁私ならずしかるに宿縁私ならず 然に豪敵に失るゝ事安からぬ事哉  
 縦令沙門の身たりといへども此<sup>(114・オ)</sup>遺恨を散して 甥の靈魂に奠せん  
 と嗔意豪盛の心を起し 忽三衣の紐を解 堅甲利兵の姿と成て 長刀を  
 脇にはさんて 群ル敵の堅陣に突て入 面もふらず働けるは 勇々數か  
 りける振舞也 味方に津曲狩野介兼業<sup>拾六</sup>と名乗て かの僧を討取ける  
 類なき働と世挙て感しける 山口直友西国下向并和睦之事

山口直友再西国下向并和睦之事

源次郎忠真は去年の水無月の始より今年二月の終迄都城に楯籠 外に  
 は拾弍の砦をかまゑ 日々夜々に防戦し 肌を破り骨をくだき 身心安  
 らず 功を尽すといへとも 今に至て落去せず 忠真か兵氣日々月々に  
 衰へ疲レ 已に山田志和池は落ぬ 恒吉は開退せり 角ては始終の勝利  
 も覚ねは 残<sup>(115・オ)</sup>留軍徒も心細ぞ思ひける 懸る処に二月下旬 内大臣家  
 康公山口勘兵衛尉直友を下させ給ひ 和睦の計略をなさしめ給ふ 速に

面影たにもとゞまらず 未弔拾歳計にも足らずして 角まで弓矢の義勇を勵し 終に黄泉に趣ける心の程ぞやさしけれ 屍は土中に収むといへ共 麁□の匂消残て 日数程ふる浅茅原 風や薰と怪<sup>へつマ</sup>らる<sup>(107・オ)</sup> 敵陣の内よりもいか成好の人やらん 空墳に差集り一入袖を絞りける 其墓今に残 駿に植たる一樹の桜 むかしの名残とて 花に涙やそゝくらん 青塚空しく苔茂して 文字たに分ぬ古卒都婆 誰無跡の駿とて草葉の底にや朽ぬらん

### 志和池の城困窮のこと

かくて白石永仙軍勢に下知して曰 勝て甲の<sup>(ウ)</sup>緒をしめよとは此時の事ぞかし 一往の利を得といへとも 始終の勝こそ大事なれ と要害いよく堅固に構 怠る隙はなかりける 明れは九日 都城にて討とる首を實検するに 一百弔拾余級也 祁答院左近引導せり 忠真一々是を觀して 諸軍にむかひいひけるは 我処々の要害を構 百千の兵を指揮し若干の敵を討事も 天命に背く所謂<sup>(108・オ)</sup> あれば 終に力尽矢渴鋒折て家門の傾敗近かるべし と喜悦の色もなかりけり 殊に墓なく覺へしは志和池に籠りし者共也 已に通路は絶塞 東は大川 西は敵陣堅固なれば 只籠鳥の雲を乞 鰻魚の泥に<sup>いさつく</sup> 風情して 甲斐なき月日を過送る城中更に糧尽て 始は牛馬の肉にて纔に飢をしのきしかども 月に随ひ日に添て食する品もなかりければ<sup>(ウ)</sup> 軍兵皆々餓疲 弓を挽べき使もなかりけり 太刀を打べき氣力だになければ 角ては何餓死し 伯夷が跡をや追なんと 詮なき命を捨兼て 数日を経ぞ無慙なる 此事都城に

聞得しかば 忠真これを救はんため 輕兵歩卒を催し 兵糧を密に續ヶ籠んとするに 便なし 敵の要害きひしくして 志和池の城を挟み鹿牆つよく構たれば いかんとすへき行もなく<sup>(109・オ)</sup> 兵糧を樽に入 夜るく潜に相圖の時を定て 水上よりは是を流す 城の腰下をめくる川なれば城中の兵卒共忍く<sup>(ウ)</sup>に立出て糧樽を拾取 暫の命を繼にける 何ものか告たりけん 寄手の勢共是を聞 川の中流に橋を掛 繩にて網を拵て川横様にぞ張たりける 流来る糧樽一ツももらさず網に掛け 味方の陣にぞはこびける 其品をさし<sup>(ウ)</sup>揚て 此ほどの長陣にはや兵糧もとほしきに 扱々忠真よりの厚志は身に餘るまでの志し と雜言してそ笑ける 寄手は弥糧を増し 城中は猶々餓にける 只徒に手を束ね 死するを待より外はなし 今年いかなるとしなれば 水無月の始より おもわさりき 兵革起て 君も臣下ももろともに寢食を安んせず 干戈に明暮肝をくだき<sup>(110・オ)</sup> 誰□な□らん 夫婦父母昆弟も離死して 夢にたも見すこの乱治て 枕を泰山の安に置 昔をおもふたてきよ 中にも子父の愛もつき 繫ぬ駒の有日なれば 移るも何としらま弓 物さわかしき年も暮て 慶長五年にそ成にける

### 志和池に糧を納んと欲事<sup>付</sup>落城事

改の年立帰るといへとも 閑心なき軍旅の宿り 明日<sup>(ウ)</sup>をも期せぬ身にしあれば 千年を賀すへき思ひもなし 城中の者とも鰻鳥の藏をそかれたる心地して 中く為方なかりければ 木の皮を剥て食となし 履革を煎て喉を湿 喰へきは草根も盡て 砂を蒸より外はなし 故城中の

田掃部左衛門尉 福本奎兵衛尉 山元善右エ門尉 宮原備後 早田孫七  
 新穂六助 厚地丹波 牟田原藤次郎 篠原源右エ門尉 村雲甚五郎  
 田口与五郎 入田右近 正教坊 久保田嘉右エ門尉 萩原宮内左衛門尉  
 永山寛内 小田善助 酒部小吉 飯<sup>い</sup>牟<sup>む</sup>禮<sup>れ</sup>作助 永野宮内左エ門尉<sup>(103・オ)</sup> 逆  
 瀬川彦八 山元千右衛門尉 村山千助 田中勘右衛門尉 原沢源兵衛尉  
 松元六助 勝部弥市 市来嘉兵衛尉 村原利右エ門尉 村岡休内 倉  
 場七兵衛尉 咄<sup>はが</sup>川西市 大峯六左エ門尉 二見平右エ門尉 谷口傳左衛  
 門尉 荒川志摩 川原次助 宮之原弥藏 谷山金八 木場竹若 溝口孫  
 介 竹下軍兵衛尉 木原孫五郎 吉永介右衛門尉 平良與三郎 萩原清  
 左衛門尉 海江田軍右エ門尉 鷲巢九郎<sup>(ウ)</sup> 関平吉 鎌田千兵衛 東郷少  
 三郎 祁答院藤兵衛尉 三島九左衛門尉 種子田久左衛門尉 平瀬郷右  
 衛門尉 近藤小左衛門尉 池袋治右衛門尉 萩原彦八 古郡新左衛門尉  
 中嶋主水 原田市之允 山口金左衛門尉 安樂仲右エ門尉 近藤次郎  
 右衛門尉 姫城<sup>ひめき</sup>五右衛門尉 中嶋三左衛門尉 同五郎兵衛尉 肥田木喜  
 助 池田新左衛門尉 洲崎五助 山口外記 斎藤神助 本乗坊 早水七  
 良右エ門尉 肥後<sup>(104・オ)</sup> 与左衛門尉 肝付九郎兵衛尉 松下主計 西牟田勘  
 左エ門尉 四位丹波 桐野小六 吉田大藏 久木田介市 平田三五郎  
 向井弥市 平田二左衛門尉<sup>爰に宮内式部左エ門尉より書落候 先に書川越民部左エ門尉長谷場久兵衛尉</sup> 平田  
 与吉 竹下帶刀 平良十良 津曲六郎左衛門尉 德永利右エ門尉 中村  
 五郎兵衛尉 宮原寛内 富山次十郎 松田右近兵衛尉 沼田源五郎 野  
 馬権之丞 村山十郎兵衛尉 岩満三郎五郎<sup>平田二左エ門之次に宮内式部左エ門</sup> 「宮内式部左エ門

尉「川越民部左エ門尉」「長谷場久兵衛尉<sup>此三人書落</sup>」<sup>此三人を書べし</sup>(ウ) 与左エ門尉 肝付  
 九郎兵衛尉 松下主計 西牟田勘左エ門尉 四位丹波 桐野小六 吉田  
 大藏 久木田介市 平田三五郎 向井弥市 平田二左衛門尉 宮内式部<sup>部</sup>  
 左エ門尉 川越民部左衛門尉 長谷場久兵衛尉 平田與吉 竹之下帶刀  
 平良十郎 津曲六郎左衛門尉 德永利右エ門尉 中村五郎兵衛尉 宮  
 原寛内 富山次十郎 松田右近兵衛尉 沼田源五郎 野馬権之丞 村山  
 十郎兵衛尉 岩満三郎五郎<sup>(105・オ)</sup> . . . . .  
 新藏坊 種子嶋次郎右エ門尉 同十郎次郎 同性勘七 其外輕兵歩卒等  
 は数挙るに暇なし 薄氷の日に消 屍は野徑に散乱す 不定の浮世と云  
 なから 有を有とも思ましきは 武士の身ならずや 逞兵突氣勇士も骨  
 を白刃利鏃の下に身を碎 旧苔芳草に埋るといへとも 名は亦浮世に留  
 て 万口の賞嘆に残ル 生死無常の理りを誰か思ひしらさらん 屍は巨  
 港<sup>(106・オ)</sup>の<sup>岸</sup>に<sup>みち</sup>填 血は長城の窟に満 貴となく賤となく枯骨となると書た  
 りしは 實にもと覺て哀也 中にもあわれに聞得しは富山次十郎といへ  
 る少人 二八計と覺しが 容顏殊に美麗にして花<sup>はな</sup>なる装束して一陣に進  
 まれしは器量骨柄人に越 誠に勇々敷見得たりしに 風呂<sup>ふろ</sup>が谷の上にし  
 て忽無情の矢先にかゝり 退命を戦場の土に墜されけるは 方見<sup>うたて</sup>かりし  
 事共なり<sup>(ウ)</sup> 苔の下道分行は 骸は白氷の刃にくたかれて 野馬の蹄を  
 傷しむ 十年余の春秋は只是一時の胡蝶の夢 蝸牛の角の上に せめて

今朝中霧嶋山の内より煙の立しぞ不審けれ　いか様味方をたはかつて  
 相近く所を見て　後を遮り討へきと　隠し勢や候らん　楚忽に掛て利を  
 失ひ　味方のよわりを仕出しては　悔とも益あらん　と理を尽して制し  
 けれ共早雄の若武者　なに<sup>(99・オ)</sup>臆病の事ないうそ　と少も疑擬せず　先を  
 争ふて討て向ふ　忠恒公も御馬を出させ給ふ　去程に味方の勢<sup>おくれ</sup>弥殿しと  
 勇進んで　已に大迫を打越堀涯に責入処に　諏訪山風呂ヶ谷の伏兵五百  
 騎　枳ヶ谷の伏兵五百餘騎左右を包て　時のこゑを拳とひとしく一文字  
 に切てかゝる　安永の城よりも相圓の吐気を突と拳たるは　湿雲雨を飛  
 ばし山上<sup>(ウ)</sup>□り<sup>(ウ)</sup>下り　怒浪沙を巻風を帯たる勢にて　無二無三に討て懸  
 ル　味方の勢も雌雄に力を勵し　命を限りに防ぎ戦ふとはいへども　三  
 方の敵に掛惱され　打るゝもの数をしらす　漸々敵を掛破り　大迫差て  
 曳退ク　中霧嶋通路の外人馬の道もなき折所なれば　味方の勢<sup>こゝかしこ</sup>爰彼方に  
 て揉合処を　三方の敵我先にと競來て　路の折処に追詰て　味方の勢五  
 百餘<sup>(100・オ)</sup>騎皆一同に打れける　爰に頼娃弥市良は手勢式百餘騎を左右に立  
 て　何の為に命を惜ん　只耆人も引へからず　と一同に必死を極て　馬  
 の手綱を引返し　群ル敵に打て掛り　已に大勢を懸ちらし　敵兵餘多打  
 取比類なき働き　諸人耳目をこそは驚せり　然るに太守忠恒公は御馬<sup>大古川又説  
五本松と云</sup>  
 を扣させ給ひて　味方難儀に見得ければ　自ら馳向せ給ふべき御気色顕  
 れて<sup>(ウ)</sup>　御馬を乗放ち給んとし給ふを　御舍人原田十左衛門くつはみに  
 すがりしかと居たりければ　御詞に　味方難儀に覺たり　自ら討て向ふ  
 べし　放て／＼　と再三四五度に及まで仰を蒙りけれ共　義久公かねて

忠恒時の變兵の色に應して楚忽の働あらん時は　構て汝制すべし　と  
 度々上意を蒙りければ<sup>とも</sup>　如何去御事の候へき　と御馬の水つきを賢固に<sup>へま</sup>  
 引得て<sup>(101・オ)</sup>居たりける　軍治りて其後　義久公聞し召れ　御感淺からざり  
 しかや

#### 戦死交名のこと

白石永仙が智謀にて寄手忽利を失ひ　骸を野<sup>クダシヨウ</sup>ゑんの荒叢に晒す　其輩  
 列　先太守の御旗元には　築瀬才助　渋谷九助　肥後仁左衛門尉　本田  
 弥四郎　菱刈伴右衛門尉　伊東善左衛門尉　鹿嶋介三<sup>(ウ)</sup>郎　築瀬伴介  
 有川藤七郎　日高善助　法元右近<sup>シ</sup>　永吉藤左衛門尉　本田出雲入道　同  
 兵助　白濱九助　久留善兵衛尉　市来七右エ門尉　長田内蔵允　廣河彦  
 左衛門尉　本田善四郎　小濱源七　川上藤右衛門尉　い地知彦八　隈岡  
 茂兵衛尉　吉川<sup>村</sup>喜兵衛尉　木脇三右衛門尉　坂元<sup>ノ上</sup>南左エ門尉　町田新介  
 永里藤右衛門尉　曾木新五郎　松下権右衛門尉　二宮玄番　松下早右  
 衛門尉　木場民部左エ門尉　木原<sup>ひとや</sup>囚獄<sup>(102・オ)</sup>田口藤太　山下孫右衛門尉　佐  
 藤孫四郎　同性勘右衛門尉　末原利右衛門尉　高城孫右エ門尉　久保堅  
 助　下津左衛門尉　蘭牟田藤八左エ門尉　洲脇善助　養毛<sup>みのけ</sup>和泉　中原藤  
 左エ門尉　鈴木仁兵衛尉　吉村三右エ門尉　秋山勘助　柊田七郎五郎  
 槽松仲左エ門尉　洲田早二郎　入佐助八　西郷孫八　轟木弥右衛門尉  
 有馬善右エ門尉　朝隈弥右エ門尉　大重主水　永山市藏　桑波田五郎兵  
 衛尉　斎藤監物　山下善兵衛尉<sup>(ウ)</sup>大井宮内左衛門尉　中山縫殿　押川久  
 藏　坂本左近　宮内六助　川原藤兵衛尉　黒木源六　川添源兵衛尉　迫



## 庄内軍記下目録

一 荒瀬伏兵の事

一 安永軍之事付寄手敗北の事一 戦死交名の事こゝめよ

一 志和池城困窮の事

一 欲納かて粮志和池事付落城之事一 山口直友再西国下向付和睦之事一 北郷長千代丸本領安堵之事ほんりよ

一 白石永仙梟首の事

一 忠真兄弟井平田増宗父子伏誅の事

荒瀬伏兵之事

同十八日霜月 高城の敵を偽引出し後を包て打べし とて森田茶ゑんか尾

より勢を出し 水流の荒瀬に隠シ置 又歩立の兵二拾余人は高城の木戸

に攻近 鉄炮を揃て打こもけるにへマツ 敵は小勢と覺たり 一揉に掛散 と城中より切て出る 兼て巧みかたのせいし慈勢一戦にも及ばず 荒瀬に向て曳退く敵の勢勝に乗り 一騎も洩96・オさす討捕れ と跡に付て追たりしに 隠置

たる荒瀬の伏兵一度にどつと呼てか、れは敵軍是に色めき立て 高城江

曳退く処を追詰 若干敵を打捕 剩高城の大手に攻寄ける 城中兵ども

味方を助て切て出れば 両陣の兵共相交て 時移る迄こそ戦ける 爰に

大久保善左衛門尉秀次は八ヶ所馬場に責入 有村三郎兵衛尉と組合て

暫くちからをウ争ふと見得しが 三郎兵衛を組伏 首を搔んとせし処に三郎兵衛が郎等はせ来り 大久保が首を打落し 下なる主を助ける  
強キ有村が佳運の程こそ不思議なれ安永軍のこゝと付寄手敗北の事

爰に敵味かた干戈の騒に日を重ね 今年もはや十二月上の八日に成に

けり 忠真か股肱の臣白石永仙が97・オ謀にて 安永の城中より兵卒五百人

を分け 中霧しま山に隠し 又諏訪山風呂の谷枳ヶ谷江も五百騎かくし

置 別に輕卒四拾五人山田城太守方へ打向せ 遠矢少々射懸て 兵勢を

偽引出しける 山田の城を守禦のため太守公より籠置れし在番の勢の中

よりも 種子嶋勢貳百騎城戸を開て打て出る 永仙か軍兵共會尺 大迫

さして曳退 種子嶋勢ウ勝に乘て面ヶ田を追越し 諏訪の邊まで追たり

しに 中霧嶋山の伏兵五百余騎一度に わつ と呼てかゝる 味方の勢

是に驚く色あつて利を失ひ 山田をさして引返す 敵は手痛責近く 不

知案内の味方の軍兵返合て戦ふに叶す 種子嶋勢百餘人面ヶ田大古川の

深田に走入 只泥に塗たる魚のこゝくいきつ喘居あゐいたる処に 敵の大勢馳来り 一人も残らず98・オ打てけり 彼永仙か謀にて面ヶ田大古川の間に味

方の勢の討るゝ事 数に暇なし かゝる処に 安永金石の城中に茅と竹

とを積交 火を焚 焰烟夥しく半天を掠 はくくとして虚空も焦か如

く 山原も灰となりぬと覺たり 森田の御陣より是を見て あわや 安

永の城に火の手を揚けるは すてに落去と考たり 打向ん と云儘に

御旗元の軍勢ウ我先にと進みける 兼て北郷勢の中より案内のために付

置し老武者の言けるは いざとよ かた／＼ 落城にては有べからず

# 翻 刻 異本二巻本『庄内軍記』 下巻

橋 口 晋 作

本稿は前第十九号に翻刻した『庄内軍記』の下巻である。但し、上巻は日高津代氏蔵本を底本にして桂木本の校異を付記するという体裁で紹介した。しかし、前号の解説に記した様に日高氏蔵本は上巻のみで、下巻を欠いている。そこで本稿、下巻は故野崎虎雄氏旧蔵本、桂木本によることになった。桂木本『庄内軍記』は現在夫人順氏の手許にはない模様（どうなったか不明）。野崎家で秘蔵していた本の様であるが、夫君虎雄氏から、この本についての話を何も聞いていないので、所蔵の経緯など一切不明とのこと。本稿は順氏の許しを得て紹介するものであるが、原本が不明の為、高城町の市園辰夫氏が複写されていたものからのコピーによった。市園氏は昭和五十五年一月二十日、桜木にある祖先野崎丹後守墓に参る為に帰省された虎雄氏から桂木本を借りて写しを撮られたとのことである。本稿がこの様な危うい縁で繋がっていることに筆者は感動を禁じ得ない。

桂木本の書誌は写しで見える処、

上下二巻揃い。目録あり（下目録 一丁）。下本文三十三丁（半丁、白

紙の所がある）。一面七行。上巻始めは総ルビに近かったが、下巻は稀に読み仮名が書き込まれている。伝 二丁。  
の通りである。

翻刻をお許し下さった野崎順氏、中介の労をとって下さった山田町教育委員会の橋本耕二氏、高城町文化財保護審議委員市園辰夫氏に厚くお礼を申し上げる。

## 凡 例

- (1) 翻刻に際しては異体字等をなるべく通行のものに改めた（漢字は表記に従って、カタカナ体、常用字体、正字体の別を残した）。
- (2) ミセケチは はとも の様な形で示し、補入、行間書き込みは細字で示した。又、読めない文字は□で示した。
- (3) 割注は細字で示した。
- (4) 本文の読み仮名は参考となるものだけ残した。
- (5) 丁付けは (1・ウ) のように記した。